

吉備国際大学研究紀要

(人文・社会科学系)

第22号, 1-6, 2012

明治・大正期における岡山県幼稚園教育にみる子ども観

雲津 英子

The Views of Childhood concerned with the kindergarten education in Okayama Prefecture during the Meiji and Taisho Era

Eiko KUMOZU

Abstract

The aim of this study is to elucidate the views of childhood concerned with the kindergarten education in Okayama Prefecture during the Meiji and Taisho era. In our studies already reported in some journals, some views of childhood have been already illuminated on the basis of (1) the liberal educators in the Taisho era and (2) the moral textbook, Japanese literature works, Educational journals during the Meiji and Taisho era.

In this study, the kindergarten education in Okayama Prefecture and the views of child care proposed by OKA, who has affected the kindergarten education in Okayama Prefecture, are mainly elucidated in detail. The novel analytical method is proposed in this research for comprehending the above researches.

Key words : The Views of Childhood, individuality, kindergarten education, OKA Masa

キーワード : 子ども観, 個性, 幼稚園教育, 岡政

I はじめに

本研究は、明治・大正期における岡山県幼稚園教育にみる子ども観を分析するものである。明治・大正期における岡山県の幼稚園教育についての研究には、岡山県教育史刊行会『岡山県教育史』、岡山県幼稚園百年のあゆみ編集委員会『岡山県幼稚園百年のあゆみ』、岡山県保育史編集委員会『岡山県保育史』などがある。しかし、社会学的なアプローチ方法を用いて、明治・大正期における岡山県幼稚園教育に

みる子ども観を分析したものは管見の限りない。

そこで本研究では、大正自由主義教育者の子ども観、明治・大正期の修身教科書・近代文学作品・教育雑誌にみる家族道徳観や子ども観、岡山県幼稚園教育の実態、岡山県の幼稚園教育に影響を与えた岡政の保育観を総合的に分析することによって、明治・大正期における岡山県幼稚園教育にみる子ども観を考察する。

なお、著者はこれまでに明治・大正期の子ども観の研究として「大正期子ども観の研究一沢柳政太

郎, 野口援太郎, 羽仁もと子を中心にして—」(『児童教育研究』第12号, 2003年), 「修身教科書にみる子ども観」(『児童教育研究』第13号, 2004年), 「近代文学作品にみる子ども観—親子関係の分析を通して—」(『安田女子大学大学院文学研究科紀要』第9集, 2004年), 「近代日本の教育雑誌にみる「個性」—『児童研究』『小学校』『埼玉教育雑誌』の分析—」(『安田女子大学大学院文学研究科紀要』第10集, 2005年), 「近代日本における「個性」の誕生と展開」(『子ども社会研究』11号, 2005年)を発表した。そして, 本論文では, 岡山県幼稚園教育の実態, 岡政の保育観を中心に子ども観を分析する。

II 明治期における幼稚園教育の普及

わが国最初の幼稚園は, 明治9年(1876)に設立された東京女子師範学校附属幼稚園(現お茶の水女子大学附属幼稚園)である。開園の主旨は「学齡未滿ノ小兒ヲシテ, 天賦ノ知覺ヲ開達シ, 固有ノ心思ヲ啓発シ, 身体ノ健康ヲ滋補シ交際ノ情誼ヲ曉知シ, 善良ノ言行ヲ慣熟セシムルニアリ」として, 幼児の活動や遊びを促す指導が重視された¹⁾。当時, 幼稚園は国家による統制はなく, 教育熱心な一部の人々のための教育機関としてスタートした。その後, 文部省の幼稚園に対する積極的態度がみられるようになり, 一般の国民にも幼稚園についての理解が広まり, 表1に示すように, 明治18年(1885)頃から幼稚園数及び幼児数は急速に増えていった。

表1 明治期の幼稚園数及び園児数

(「学制八十年史」による)

年次	9	10	12	14	16	18	20	22	24	26
園数	1	1	4	7	12	30	67	112	147	156
幼児数	75	158	253	426	554	1,893	4,147	7,360	8,662	13,261
年次	28	30	32	34	36	38	40	42	44	
園数	219	222	229	254	281	313	386	443	497	
幼児数	17,428	19,727	21,804	23,671	25,803	28,676	35,285	37,328	45,202	

出典：岡山県保育史編集委員会(1964)『岡山県保育史』8頁 フレーベル館

III 明治・大正期における岡山県幼稚園教育の普及

岡山県における最初の幼稚園は, 明治17年(1884)に設立された岡山県師範学校附属幼稚科である。全国の幼稚園数は, 表1に示すように, 明治12年(1879)に4園, 明治14年(1881)に7園, 明治16年(1883)に12園であり, 岡山県において最初に設立された幼稚園は, 全国的にみてもかなり古いものである。

なお, 明治17年(1884)に岡山県師範学校の幼稚科が設立されて以後, 表2に示すように, 岡山県の公立幼稚園数は, 明治10年代に3園, 明治20年代に12園, 明治30年代に17園に増えていった。さらに明治40年代には19園となり, 私立幼稚園5園を含めると全国5位の幼稚園数であったとされている²⁾。

その後, 大正期においては, 教育に対する関心が高まる一方で, 市町村経済が苦しく, 幼稚園の設立は多くなかった。表3に示すように, 大正後期になり幼稚園数はやや増えており, 大正15年(1926)における「幼稚園令」制定とともに岡山県内で幼稚園数が急増したと考えられる³⁾。

IV 明治・大正期における「個性」の誕生と展開

明治期においては, 明治政府の権力を支えるイデオロギーの基盤として, 近代的家族制度が存在していた。この制度の下では, 子どもは天皇及び親の「恩」に報いるために「絶対的服従」を強いられていた。

表2 明治年代の岡山県の幼稚園設立数（公立）

年 代	明治 10年代	明治 20年代	明治 30年代	明治 40年代
設 立 数	3	9	5	2
設立累計	3	12	17	19
全 国	38	223	360	534

出典：岡山県保育史編集委員会（1964）『岡山県保育史』
54頁 フレーベル館

表3 岡山県における幼稚園数の変遷

（「岡山県統計年報」による）

	明治 36	40	大正 3	7	14	昭和 元	2	4
県 立 幼稚園	1	1	1	1	1	1	1	1
市町立 幼稚園	12	18	18	19	27	34	42	48
私 立 幼稚園	1	5	7	5	12	12	15	22

出典：岡山県保育史編集委員会（1964）『岡山県保育史』
62頁 フレーベル館

このような道德観は、明治初期から昭和初期に至るまで、修身科において一貫して教え込まれていた⁴⁾。

また、このような家族制度の下では、子どもは親の「所有物」としてとらえられ、子どもの「個性」や「自由」は認められていなかったことが、明治43年（1910）に掲載された島崎藤村の小説『家』、高村光太郎の詩「根付の国」の分析から明らかである⁵⁾。

その一方で、明治20年代後半から30年代前半にかけて先駆的な人々によって「個性」が認識され始めていた。このことは、明治31年（1898）に創刊された教育研究所（のちに改名：日本児童研究会、日本児童学会）の機関誌『児童研究』の分析から明らかである⁶⁾。本誌は、明治・大正期における教育、心理、保健の研究に大きな成果をあげた教育雑誌の一つである。読者の対象は主に、教育学、心理学、医学などに関係する研究者、あるいは教師であり、先駆的な教育思想や全国的な教育の実態を捉えることができるものである。

さらに、明治16年（1883）から大正9年（1920）

まで埼玉私立教育会事務所によって刊行された教育雑誌『埼玉教育雑誌』による「個性」についての記述は、明治40年（1907）頃である。このことから地方の教育会が少しずつ「個性」に関心をもち始めるのは、明治後期に入ってからであるといえる⁷⁾。

大正期の「個性」の概念は、明治30年代に先駆的な人々によって用いられていた「個性」の概念とほぼ同義である。しかし、明治期に比べて「個性」の重要性についての認識も深まり、またさまざまな教育者が広く関心を寄せるようになった。このことは、大正9年（1920）から昭和8年（1933）まで刊行されていた教育雑誌『教育問題研究』、大正12年（1923）から昭和2年（1927）まで刊行された教育の世紀社の機関誌『教育の世紀』の分析から明らかである⁸⁾。

V 明治・大正期における岡山県幼稚園教育の実際

1. 明治20年代の保育

東京女子師範学校附属幼稚園では、明治10年以降「保育唱歌」という雅楽にもとづく唱歌集を作成し、それを園児に歌わせ始めていた。また、東京師範学校附属小学校において、明治13年（1880）に初めて「唱歌」を課したが、学校において唱歌が徐々に普及していくのは明治20年代に入ってからである。当時、高梁幼稚園で教育をうけた小倉章蔵氏は、次のように述べている。

其頃は、幼児向きの唱歌はなくて、何でもかでも一樣なのを歌わされました。ただ口移しで歌うので、質問することもなく、解釈してもらうのでもないから、わからぬことを自分で理屈付けていました。

当時歌われた「霞か雲か」の中の一節の「……とばかり匂う……」というのは「霞か雲かはた雪かとばかり」となるのです

が、「はた雪か」で切れて「とばかり……」以下が次の小節になるのでわからないのです。わたし達は「戸ばかり匂う」と解釈していました。夕立が来て杉の板戸を濡らした後、日光にてらされて水分が蒸発する時、妙な、ほっぼろぐさい香がする、あれだなと思っていました。

もう一つ、「ももとりさえも」が百鳥とはわからず、「祭文語りが桃を盗んだな」と思っていました⁹⁾。

このように、明治20年代の唱歌は、子どもたちの「個性」や自発性を尊重しようという考え方ではなく、子どもたちの生活の中にはなかった雅楽によって作られたものであり、子どもたちにとっては難しいものであったことがうかがえる。

2. 明治30年代の保育

明治30年代前半の岡山市清輝幼稚園では、毎日欠かさず遊戯の時は「民草」を歌っていた。この「民草」も「保育唱歌」と同じく、子どもたちにとっては理解が難しい歌詞であった。「民草」の歌詞は、次の通りである。

民草の栄ゆる時と苗代に
水せき入れてみしめなば
ゆ田に引きはへやつか穂の
たり穂の稲の年あらん
心頼みを今おろすなり¹⁰⁾

明治30年代前半においても、子どもたちの「個性」や自発性を尊重しようという考え方ではなく、子どもにふさわしい唱歌は取り入れられていなかったと考えられる。

その後、明治33年（1900）に小学校低学年の子どもを対象にした納所弁次郎、田村虎蔵共編の「幼年

唱歌」が作られた。その中には、「金太郎」、「うらしまたろう」、「はなさかじじい」、「おほえやま」、「モモタロウ」、「兎と亀」などが含まれた。この新しい動きに対し、岡山市旭東幼稚園に勤務していた高木万寿は明治37年（1904）～38年（1905）ごろ、東京のフレーベル会の講習で「兎と亀」を習い、それを岡山の各園の保母に伝えた¹¹⁾。このことが、岡山県幼稚園教育における唱歌の変革に大きな影響を与えた。つまり、岡山県幼稚園教育において、明治後期に入り、徐々に子どもにふさわしい唱歌の導入がみられ始めたと考えられる。

また、明治30年代の岡山県幼稚園教育においては、修身に関するものが多く取り入れられており、子どもたちの道德観の形成に影響を与えていたと考えられる。深柢幼稚園の保育については、次のように述べられている。

毎日会集を行ひ後三十分宛室内外で保育す。鐘の合図に嚴重に保育を打切り、組々に整列し礼をなして分れ室外の自由遊戯に移る。談話は毎日必ず行ふ、修身歴史に関するものを多く取入れお伽噺も時に加へた。手技は恩物を交々用ひ指範模倣後自由になす、遊戯唱歌も毎日行つた¹²⁾。

また清輝幼稚園の保育については、次のように述べられている。

時間割にて保育す。午前中のみ。

会 集

庶物話一名称、種類、部分、色形、形状、産地、性質、応用、効用の順に話す。

修身話一歴史的人物につきて、時にお伽話をすることもありしが、最後に「皆さんもこれこれではなくてはならぬ」といふことを加へることになつてゐた。

唱歌遊戯—民草といふ遊戯は、幼稚園では
必ずすべきものとされてゐた。
書き方—石盤を用ふ。
二十恩物¹³⁾

日本において明治後期から大正期にかけては、近代的家族制度における家族道徳、すなわち子どもの「個性」や「自由」を規制していた道徳が存在していた。岡山県幼稚園教育においては、明治後期には徐々に子どもにふさわしい唱歌の導入がみられ始めたが、一方で「修身話」を保育に取り入れ、「皆さんもこれこれではなくてはならぬ」という道徳観を教え込んでいたことがうかがえる。つまり、明治後期の岡山県幼稚園教育においては、子どもの興味や関心、子どもの「個性」を尊重した保育が定着するに至っていなかったことがうかがえる。

3. 岡政の保育

岡政は、明治41年（1908）3月に東京女子高等師範学校保育実習科を卒業後、岡山県師範学校附属幼稚園主任保母として赴任することになった。岡は、昭和8年（1933）9月に同園を退職するまでの25年間、幼稚園教育の方法や内容の充実のために貢献し、明治・大正期における岡山県の幼稚園教育に影響を与えた。そこで、岡の教育理論と実践を分析する。

秋山和夫は、「岡政¹⁴⁾」において、岡が岡山県師範学校附属幼稚園へ赴任した明治41年（1908）の岡山県下の保育の主流は「園児に知識を与える」ということであり、小学校教育の内容や方法の程度を下げたものが幼稚園の保育であると述べている。また、当時の保育室は小学校と同じように、園児は2人ずつ机について正面を向き、保母のための教授用の黒板や教卓が正面に並べられており、保育は時間割によってなされ、ベルの合図が用いられたとしている。つまり、明治40年代初めの岡山県の幼稚園教育においては、子どもの興味や関心、子どもの「個性」は

重視されていなかったと考えられる。

こうした中で、岡は、子どもの自発的活動を尊重し、子どもの興味や関心、子どもの「個性」に着目した。岡の保育観は、大正13年（1924）に京阪神連合保育会で発表された次の4点の提言によくあらわれている。

- 1 すべての形式的束縛を脱すること。
- 2 新保育を実施すれば、組を固定することはできず、受持を厳密に決めることができないので、組を廃し、受持時間の長短を自由にする。
- 3 保育室はもちろん、園内のすべての部屋を園児が自由に使えるように解釈する。
- 4 鐘をならして時間の合図をする必要もなくなり、ことに、あのベルの音は神経を過敏に導くため、鐘の合図を止め、保母の自律性を重んずる。

秋山は、上記のような保育観に共鳴する幼稚園は大正6年（1917）頃から岡山県下にあられはじめたが、岡の保育法を完全に定着させるには及ばず、教具や備品の改良などの部分的な導入にすぎなかったと述べている¹⁵⁾。このことから、大正中期の岡山県の幼稚園教育においてもなお、子どもの興味や関心、子どもの「個性」を尊重した保育が定着するに至っていなかったことがうかがえる。

Ⅵ おわりに

著者は、これまでの研究で、明治20年代後半から30年代前半にかけて先駆的な人々によって「個性」が認識され始め、地方の教育会が少しずつ「個性」に関心をもち始めるのは、明治後期に入ってからであることを明らかにしている。

本研究では、幼稚園の普及において全国的にみても上位を占めていた岡山県において、岡政の保育観のような子どもの興味や関心、子どもの「個性」を重視した保育観に共鳴する幼稚園は大正6年(1917)頃から岡山県下にあられはじめが、完全に定着

させるには及ばず、大正中期の岡山県の幼稚園教育においてもなお、子どもの興味や関心、子どもの「個性」を尊重した保育が完全に定着するに至っていなかったことを明らかにした。

引用・参考文献

- 1) 岡山県幼稚園百年のあゆみ編集委員会(1985)『岡山県幼稚園百年のあゆみ』1頁
- 2) 岡山県保育史編集委員会(1964)『岡山県保育史』フレーベル館 54頁
- 3) 同上書 63頁
- 4) 拙稿(2004)「修身教科書にみる子ども観」『児童教育研究』第13号 安田女子大学児童教育学会
- 5) 拙稿(2004)「近代文学作品にみる子ども観」『安田女子大学大学院文学研究科紀要』第9集 安田女子大学大学院文学研究科
- 6) 拙稿(2005)「近代日本における「個性」の誕生と展開」『子ども社会研究』11号 日本子ども社会学会
- 7) 同上
- 8) 同上
- 9) 前掲書『岡山県保育史』161～162頁
- 10) 同上書 164頁
- 11) 同上書 164～165頁
- 12) 同上書 158頁
- 13) 同上書 158～159頁
- 14) 秋山和夫(1977)「岡政」幼児の教育76(2) 日本幼稚園協会 9頁
- 15) 同上書 11頁